

扶桑讀本

尋常科用

四之上

不認定等

K1208

66

4.1

K120.8

66

4.1

扶桑讀本

東京大学理科



扶桑讀本第七

第一 開墾



昔時ハ、人口少ク、田野多
カリケレバ、人民、各、父祖
ノ田地ヲ守リテ、一家ヲ維
持シ、又、其家業ハ、子孫ニツ
タヘテ、安樂ニクラシタリ。

守維持

安樂

今ヤ、世開ケ、人口増加シ、
商業家モ、工業家モ、各、ア



更
ラソヒテ、種種ノ新事業ニ從ヒ、更ニ、工夫
ヲ加ヘテ、精巧ヲキソヘリ。

開墾
農業モ、亦然リ。アレ地ヲ開墾シテ、田畑ヲ
得ザレバ、年二月ニ増加セル人ノ用ヲ達ス
ルコト能ハズ。是、多クノ人ノ、北海道等ニ
ウツリ、開墾ニ從事シ、未來ノウレヒチフ
セグ所以ナリ。

第二 毛利元就ノ教戒

元就
毛利元就、終に臨み、其子三人を、枕べに招き、

矢
一本づつの矢を取りて、之を折らしめしに、三

子は、ひろかにあやしみつつ、之を折りたりき。

元就、更に、一束の矢をあたへしに、三子、交る交る折らんとせしかど、折れざりけり。

其時、元就、容を改め、三子にむかひて、いふやう、聞けよ、汝等、一國を守るも、なほ、此の如し、若し、互に仲悪くな



互、仲

交

る時は、敵のために、國を侵さるること、恰も、一本づつの矢の、折れやすきが如し。吾、若し、死なば、兄弟、心を一にし、此國を守れ、心一なる時は、恰も、一束の矢の、折れざるが如く、安全に、家を保ち、國を治むべしと教戒しめたり。されば、汝等も、兄弟仲むつまじくして、家と治むること、大切なり。

教戒

重 田畑を開墾し、工事を精巧にし、商業を盛にして、習 家を守り、業を維持せば、従つて、安樂の生計を得べし。
一 元就の教戒は、國を保ち、家を起す基なり。

第三 音響

音響

夫、音響ハ、其物ノ分子ノ震動ニヨリテ、生

震動

ズルモノニシテ、物體震

動スレバ、之ガタメニ、其

周邊、顫動

周邊ノ空氣、亦、顫動シ、

傳達

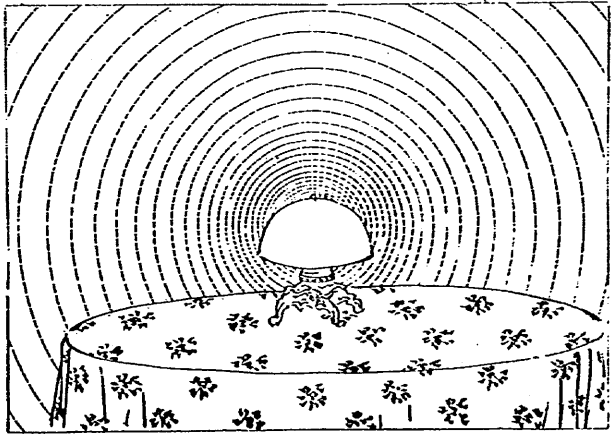
終ニ、吾人ノ耳ニ傳達ス。

音ヲ傳フルコトハ、只、空

氣ノミナラズ、水石木金

媒

等モ、亦、音ヲ傳フル媒ヲ



遅速 ナスナリ。然レドモ、其傳達ニ、遅速アリ

テ、水ハ、空氣ヨリモ速ニ、木金石ハ、又、水ヨリモナホ速ナリ。

繁多 物體分子ノ震動、急速ニシテ繁多ナレバ、
寡少 高音ヲ生シ、遅緩ニシテ寡少ナレバ、低音ヲ生ズルモノト知ルベシ。

第四 鶴

舞 鶴 鶴は、大なる鳥にして、高木に巣くひ、天空に舞ふ。其羽毛は、甚だ美麗にして、其聲、

曉曉丹頂

曉曉たり。ことに、丹頂の鶴は、頭に、赤き肉冠ありて、まことに奇麗なり。

庖人 餌 胃



鶴は、食をむさばらざる鳥なると以て、甚しき長命を保つものなり。昔、或る庖人の、鶴を料理すること、其胃とくらべしに、一として、其餌の、胃に充満せるものなかり

齡

腸

きとろ。此より推せば、鶴の長命を保つは、全く食物を節するに由ること明なり。されば、昔より、鶴は、千年の齡を保つと云へること、亦宜ならずや。人として、牛飲馬食、胃とやぶり、腸とろこなひ、自から生命とちぢむるがときは、まことに、れろかなるかぎりといふべし。

重 物體分子の震動して、周邊の空氣顫動するときは、
習 音響を發するものなり。
第 其聲唳唳、天空に舞ひ、其齡、千年の長きを保つは、
二 丹頂の鶴なり。

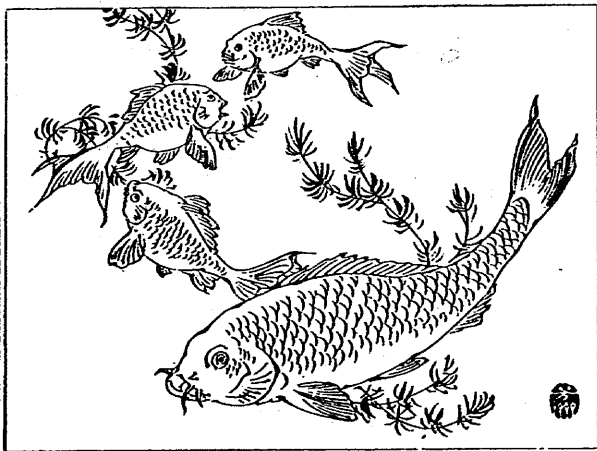
緋鯉

第五 金魚と緋鯉

稀

燒麩

池ノ中ニハ、數多ノ緋鯉ト、金魚トヲ養ヘリ。
金魚ハ、浮出デテ游泳ス
レドモ、緋鯉ハ、浮出ヅル
コト稀ナリ。
今、一人ノ女子、燒麩ヲ投
與ヘタレバ、數百ノ緋鯉
ハ、浮出デ、争ヒテ、燒麩
ヲ食セリ。



其池ハ、風ナキニ、波ヲ起シタリ、是、鯉ト鯉トガ、食ヲ争ヒテ、ヲドリ廻レバナリ。

金魚ハ、波ノ間ニ、水ニツレ、此方彼方ト泳ギツツ、争ヒモセデ、却テ、タヤスク、一個ノ燒麩ヲ得タリ。

楮、此女子ハ、投ゲアタヘタル燒麩ヲ、鯉ノ、面白ク争ヒタレバ、タノシミテ、思ハヌ時間ヲツヒヤシタリ。

却

第 六 卷

氣候

伴

散步

櫻樹

梢



今は、春の氣候なり。父は、愛らゝき子供と伴ひ、櫻花の咲亂れたる園に散歩せり。

此櫻樹は、數十年を経たるものと見えて、幹太く、枝茂り、梢は、甚だ高く、満樹、皆、奇麗なる花と著けたり。

彌生 霞 賞

四方の山に、雪かとはかり、白く見ゆるものは、櫻にして、遠くのうめば、恰も、雲の懸れるが如く、霞のたなびけるが如し。今様のうたに、春の彌生とて、此景色を賞したる古人の歌あり。實に、櫻は、我國の名花にして、外國には、絶てなきものなり。

重習第三

緋鯉金魚は、燒麩を争ひて、池の中に泳廻れり。春の彌生の氣候には、園中に散歩して、花を觀る。

第七 豊臣秀吉

豊臣藤 尾張 貧賤 流寓 敏捷

豊臣秀吉ハ、初ノ名ヲ、木下藤吉郎ト云ヒテ、尾張國ナル一農夫ノ子ナリキ。幼時、家、極メテ貧賤ニシテ、諸方ニ流寓シ、年壯ナルニ及ビ、織田信長ニ仕ヘタリキ。秀吉ハ、面、猿ニ似テ、心、甚ダ敏捷ナリケレバ、大ニ、



任

信長ニ愛セラレテ、部將トナリヌ。秀吉、兵ヲ用フルコト、神ノ如ク、シバンバ、功ヲ立テテ、終ニ、筑前守ニ任ゼラレ、信長ヲ助ケテ、諸方ノ強敵ニ勝チ、殆ド、天下ヲ平定セントセシニ、信長、中途ニシテ、其臣明智光秀ノ爲ニ、弑セラレタリ。

山崎

謀 反

秀吉ハ、山崎ノ一戦ニ、光秀ヲ亡シシモ、信長ノ老将等、秀吉ノ功ヲ子タミ、相謀ル所アリシガ、反テ、秀吉ノ爲ニ、亡サ

關白



レタリキ。

秀吉、遂ニ、天下ヲ平定シ、關白ニ任セラレテ、天下ノ政ヲ執リ、大坂城ヲキヅキテ、此ニ居リキ。秀吉、志大ニシテ、明ノ世ノ政亂レ、備修ラザルヲ聞キ、水陸十五万ノ大軍ヲ送リテ、先ヅ、朝鮮ヲ攻メ、殆ド、全國ヲ、亡サントセ

國威
シガ、タマタマ、病重ク、軍ヲ反シテ、功
成ラザリシモ、大ニ、國威ヲ海外ニ見シタ
リ。

アア、豊臣秀吉ハ、其初、人奴ノ卑賤ヨリ起
リテ、百戰百勝、終ニ、位、人臣ノ極ニ上
リヌ。誠ニ、類マレナル英雄ナリト謂フベ
シ。

重習第四

豊臣秀吉は、性、敏捷、幼時、諸方に流寓し、壯にし
て、信長の部將となり、終に、天下を一統し、朝鮮
を攻め、國威を海外に見しし英雄なり。

第八 料理

組 竈

此家の人人は、甚だいろいろがはりき様なり。
組
に、野菜を上げて、切る人
あり、竈に、火をたきて、
物と煮る人あり。
此人のかたはらにある料
理の品は、何何なりや。
魚類には、鯛あり、かつと
あり、ひらめあり、貝類



乾物

胡蘿蔔

蓮

酢

味噌

砂糖
醬油

は、鮑、かき、はまぐり等にて、鳥類には、鶏、
鶯、鴨等あり。乾物は、かんぺう、椎茸、こん布
等にて、野菜は、蘿蔔、胡蘿蔔、牛房、蓮根等
なり。料理の仕方は、種種あれども、鯛と、さ
し身と、鮑と、酢の物と、其他の魚介、鳥
肉、野菜等は、或は、あぶり、或は、味噌に漬
け、或は、鹽に漬くるなど、風味、最もよき様
にすると、第一とす。

すべて、料理とするには、鹽、砂糖、醬油、酢、

要

味噌などを要す。料理の仕方と心得るは、
必要なることにて、ことに、女子には、最も
入用の事柄なり。

第九 漁業



我國ハ、四面、海ニツツマレ
タルヲ以テ、沿海ノ地方ニ
於ケル人民ハ、魚介、海藻
等ヲ、取ルヲ業トナスモノ、
甚ダ多シ。

人民
藻

釣 干瀉 器械 捕獲 改良

魚類ヲ捕フル法ハ、海ノ模様ト、魚ノ種類トニ由リテ、一様ナラザレドモ、網ト釣トノ二ツヲ通常トス。貝類ハ、多ク、干瀉ニ漁リ、又、深ク海底ニ入リテ、取ルコトアリ。スベテ、漁業ハ、其用フル器械ノ如何ニ由リテ、捕獲ノ多少アルモノナレバ、其器械ヲ改良シテ、我國ノ富ヲ計ルベシ。

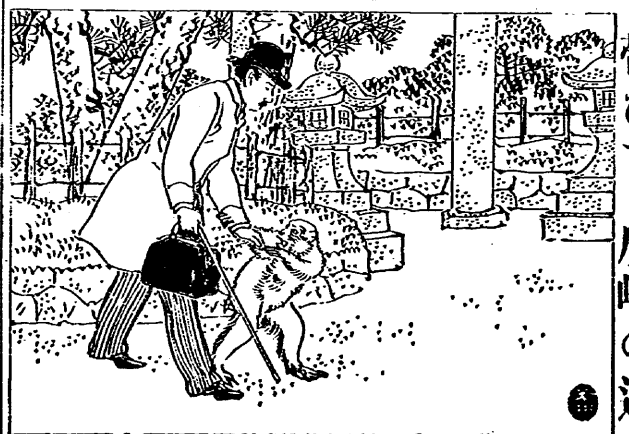
重 鮑を酢漬とし、味噌を汁こす。砂糖 醤油は、魚類、
習 乾物、野菜等の料理に入用なるものなり。
第五 漁業は、我國の富を計るべき業にして、捕獲の器械、
五 を改良するに、必要なり。

第十 猿ノ忠義

院長、帶 傍、在、宮 杖 裾

或る病院の院長は、公用を帯びて、廣嶋の近郷と通行せしに、思ひもよらず、路傍に在る宮の内より、一匹の猿走り出で、上衣の裾に取りすがりたり。

院長は、驚きて、杖にて、之と拂へども、猿は、なか



なか、立ち去らんとする氣色なく、益益取り
すがり、手と合せて、院長を拜し、宮の方へ
伴はんとせり。

不思議

急症

院長は、不思議のことと思ひ、猿のみちびくに
まかせて、宮の内に到り見れば、一人の男、急
症にかかり、伏し轉びて、息もたはたはに苦し
み、九死一生の模様なり。院長は、奇しきこと
と思ひしる、直に、其男を診察し、用意の薬
と與へ、手と盡しければ、病人は、次第次

診察
用意
薬

謝

第に、吾に反りて、深く、院長の親切を謝し
たりとぞ。

渡世

俄



此病人は、猿廻しとて、日日、
猿を舞はせて、渡世となす
ものなり。然るに、俄に、持
病の起りたれば、如何とも
すべき様なかりしと、猿の
手引により、幸に、一命と
たすかりぬ。

かかる動物すら、能く、恩義を知り、主人の急病を見て、之をたすくる工夫となりは、實に感すべき事にあらずや。

然らば、我等の、人より受けたる恩は、必ず、能く之と思ひ、主人には、能く忠義を盡し、此猿に耻ぢざらんやう、勉むべきことを、深く心得べし。

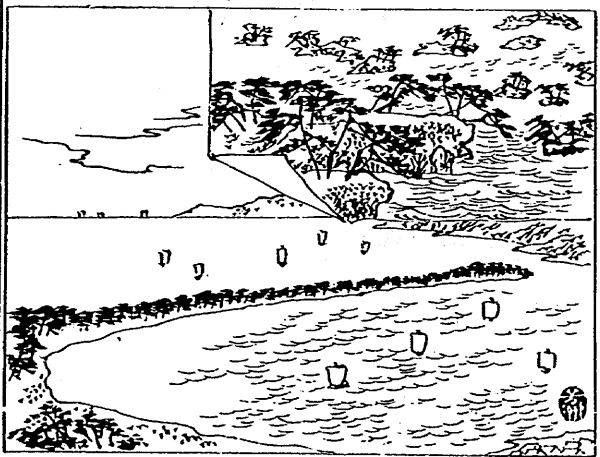
重猿は、病院長の上衣の裾にすがりて、猿廻しの急病習をすくひたり。
第六 不思議の事にて、猿に助けられたる、猿廻しの話を聞きたるか。

第十一 日本三景

世界 我日本國ハ、大ニ、山水ノ景ニ富ミ、世界ノ
稱 樂園ト稱セラレタリ。

安藝 中ニモ、陸前ノ松嶋、丹
嚴嶋 後ノ天ノ橋立、安藝ノ嚴
絶佳 嶋ハ、風景、コトニ絶佳
ニシテ、我國ノ三景ト稱
セラル。

松嶋ハ、陸前ノ入海ニ



群嶋

在リテ、數百ノ群嶋、海上ニ散布シ、大ナルモアリ、小ナルモアリ、起テルガ如ク、伏セルガ如キ嶋嶋ハ、皆、其オモムキヲコトニスレドモ、嶋上ニハ、總テ古松ヲ生ジ、葉茂リテ、翠ヲシタタラス。是、松嶋ノ稱アル所以ナリ。

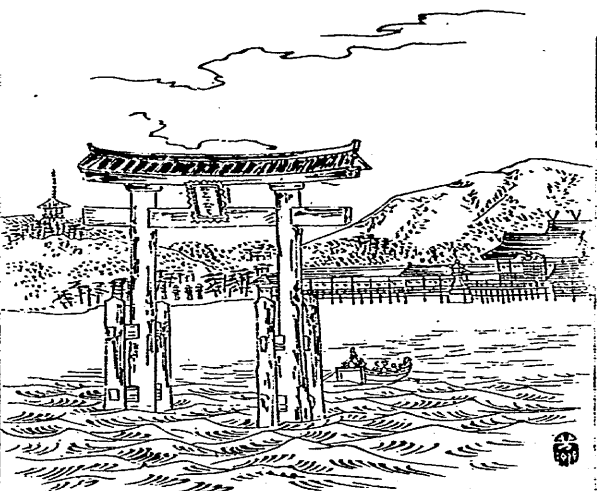
總 翠 洲 幅

天ノ橋立ハ、丹後ノヨザノ海ニアリテ、一帯ノ長洲、遠ク海中ニヨコタハリ、其長サ、一里バカリ、幅、僅ニ二三十間ニ過ギズ。緑ノ松ハ、

映

長洲ノ上ニ、ナラビ茂リ、白砂青松相映シテ、遠クヨリ、之ヲノゾメバ、恰モ、長橋ヲ、波上

架



ニ架ケタルガ如シ。故ニ、之ヲ浮橋トモ云フ。嚴嶋ハ、又、宮嶋ト云フ。安藝ノ國ノ海中ニアリテ、嶋ノ北方ニ、嚴嶋神社アリ。其社殿ハ、昔、平清盛ノイトナミシ

社 清盛

回廊 階殿 盡

モノニシテ、海ニ架シテ、之ヲカマヘ、左右ニ、長ク回廊ヲ廻ラシ、水満ツレバ、白波來リテ、階下ヲヒタシ、其社殿、恰モ、海上ニ浮ブガ如ク、其絶景、コトバニモ盡シガタシ。内外人ハ、争ヒテ、此地彼地ノ景色ヲサグリ、愛シ樂シムモノ甚ダ多ク、遊人、常ニ杖ヲタタズ。

重 日本三景とは、松嶋、天の橋、宮嶋を云ふ。皆、風習 景絶佳、愛すべし。宮嶋は、宮殿回廊水上に浮び、第七 松嶋は、無数の嶋嶋、翠松緑にして、天の橋立は、白砂青松、長くして橋の如し。

第十二 徳川家康

頃 一統 遂

三百年以前の頃、天下、大に亂れ、戦やむ時なかりしと、織田信長、前に、これと平げんの志ありて、其業遂げざりき。豊臣秀吉、其後と承け、始めて、天下を一統せりと雖も、中途にして薨トき。徳川家康は、三河より起り、



略兵勢

封幕府

傍近と略取し、兵勢、最も強く、遂に、海内
と一統しけり。家康は、天下の地と分ちて、
諸侯と封じ、幕府を、江戸に開きぬ。是に
れて、海内、皆、徳川氏に服し、三百年の
太平といたせり。

俗、家康は、學を好み、兵を用ふること、神
の如く、朝廷と重んじ、とごりと惡み、國家
の本末、人事の細事に至るまで、暗知せざ
るはなかりき。是を以て、天下の士人、皆、

暗

耻と知り、とごりと惡む良風となりたり。

第十三 老僧の接樹



昔、江戸ノ谷中ノ、或寺
ニテ、一人ノ老僧、餘念
ナク、接樹シテアリケルガ、
時ノ將軍、其傍ニ來リテ、
御坊ノ齡八十餘、今、カ
クセラルトモ、其樹ノ成
長マデハ、存命覺東ナカ

餘念

接樹

坊

存命

ラント云へリ。

老僧ハ、此樹ヲ接置キナバ、後ノ住持ノ時
代ニハ、木ハ、生茂リ、寺ノ景色モ、佳ナル
ベシ、ナドテ、一代ニ限ルコトカハトイラ
ヘテ、復、餘念ナク接ギケリ。

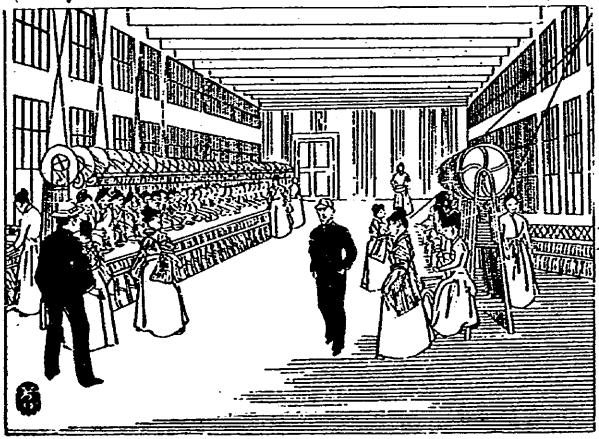
將軍ハ、其子孫ノタメニ、深切ナル志ヲ聞
キ、イタクサトリテ、感心シタリトゾ。

重信長、秀吉、家康は、皆、天下を一統せんの志を有
習し、信長、之を開き、秀吉、之を平げ、家康、之を成
第セリ。
八老僧の接樹は、後來の爲にして、一身の爲ならず。

第十四 工業

欠 人類の生活に、最も必要にして、欠ぐべか
らざるものは、衣食住の
三なり。

需 此三需は、原、皆、農業に
よらざるべからずと雖も、
衣服居住の如きは、一旦、
農夫の手とはなれても、な
且 は、多くの手數と經ざれば、



繭、繰、紡

其用を爲し難し。

繭も綿も、或は、繰り、或は、紡ぎて、機にか
け、布となして、後、始めて、種種の用に供せ
らる。家屋器具等も、亦然り。此等の仕事と、
工業と云ふ。されば、工業の必要なこと、もと
より、論をまたざるなり。

工業の隆盛は、技術の練磨と、機械の改良と
により、精良なる物品と、廉價に作出すに
ありて、國の富も、亦、此にあらざれば、得

隆盛
技磨
論

ること能はざるなり。

第十五 虹

晴 霧
晴天ノ日、水ヲ、口ニ含み、太陽ヲ背ニシテ、
霧ヲ吹ケバ、種種美麗ナル色ノ、面前ニ現ル
ルヲ見ルベシ。

雨ノ前後ニ、空中ニ現ルル美麗ナル色ハ、即
チ、之ト同ジ理ニテ、太陽ノ光線ノ、水蒸氣ニ
觸レ、分レテ、七色ヲ現スモノニテ、之ヲ、
虹ト名ツク。故ニ、虹ハ、必ズ、太陽ト相向ヒ

觸 虹

テ、現ルルモノナリ。



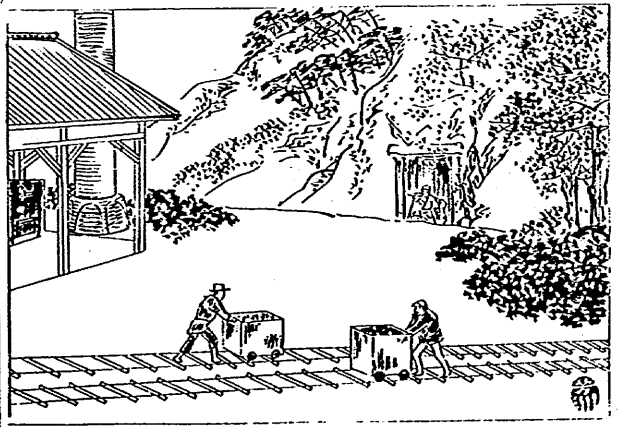
紫紺
其色ハ、今、圖ニ示セルガ如ク、紫紺、青、緑、黄、
黄柑、赤ノ七色、順次ニ現ル。之ヲ、日光色ト
云フ。此七色ノ中ニテ、青、黄、赤ヲ、原色ト
云ヒ、其他ノ色ハ、原色ノ配合ニヨリテ、種
種ニ變化セルモノト知ルベシ。

重習第九
工業の隆盛は、技術の練磨と、機械の改良とにより、
精良なる物品を得るにあり。
虹は、雨滴の、日光に觸れて、七色を現すものなり。

第十六 石炭

埋没
石炭は、礦物の一種にして、其原は、太古の
樹木の、久しく土中に埋
没し、化して、燃石とな
りたるものなり。

層 漏 脈穿
其地中にあるや、廣大な
る層となすものなれば、
之を掘るには、先づ、其礦
脈に、大なる井を穿ちて、



坑採

炭層に達せしめ、坑夫、此坑中に入りて、採
掘に従事し、其採りたる炭は、坑内に布設せ
る鐵道、或は、馬の力にて、之と井坑の下に
運べば、陸上に設けたる、大なる蒸氣機械
の力によりて、之と引上ぐるなり。
其効用は、甚だ廣くして、蒸氣機關の燃料
には、凡て、之と用ふ。我國にて、石炭の産
地は、肥前の高嶋、筑後の三池、北海道の幌
内等、最も有名なり。

幌内

第十七 螢雪

人ノ、學事ニ勉強スルコトヲ、螢雪ノ苦ヲ
爲スト云フ。汝等ハ、其故ヲ知レリヤ。

此ハ、車胤ト孫康トガ故事ヨ
リ出デタル語ナリ。

車胤モ、孫康モ、支那ノ人ニ
テ、幼ヨリ書ヲ讀ムコトヲ好
ミンカドモ、家、赤貧ニシテ、
油ヲ買フベキ資ナカリケレバ、



車胤

語

資

袋 集 顯 忍

車胤ハ、夏夜、螢ヲ、袋ニ盛り、孫康ハ、冬夜、雪ヲ集メ、燈火ニ代ヘテ、勉學ノ功ヲ積ミ、終ニ、立身出世シテ、名ヲ顯シタル人ナリ。古ノ人ハ、斯ノ如キ苦ヲモ忍ビテ、學問ヲ成シシモノ、マコトニ多シ。汝等モ、宜シク、此等ノ人ヲ手本トシテ、能ク勉強セザルベカラズ。

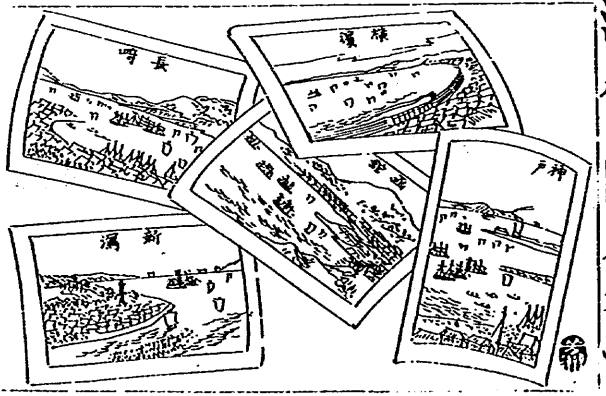
重 石炭の用は、最も廣し。石炭は、太古の樹木の、久し習く土中に埋没し、化して、燃石となりたるものなり。第十 車胤は、螢を集めて、燈火に代へ、孫康は、雪を集めて、燈火に代へき。

海岸

攝津 横濱 越後 渡嶋 箱館 互市場

第十八 五港

我國は、四面、海と回らし、海岸の出入、甚た多く、從ひて、良港に富めり。就中、武藏の横濱、攝津の神戸、肥前の長崎、越後の新潟、渡嶋の箱館と、五港と稱して、外國との互市場とす。五港の中にて、最も早く開



軍艦
輻湊

けたるは、長崎港にて、最も新しきは、新瀉
港なり。又、其繁盛なるは、横濱にて、新瀉
の如きは、港内、水浅く、大船を泊するに便
ならざるなり。
然れども、此五港は、軍艦、商船、常に輻湊
し、物貨の出入、断にまなく、外國人の來り
住するもの、亦多し。

第十九 農夫の遺言

凡ソ、農業ハ、種子、肥料、地質等、意ヲ用フ

碎

肝要

讓



ベキモノ、擧テ數フベカラズト雖モ、能ク
勉メテ、深ク耕シ、細ニ、土クレテ碎キ、雜
草ノ生エヌヤウ、意ヲ用フ
ルコト、肝要ナリ。

昔、一人ノ老イタル農夫、
其子ニ向ヒ、我、汝等ニ讓
ルベキタカラハ、畑ノ中ニ
藏置キタレバ、能ク勉強シ
テ、之ヲ得ベント云ヒテ、

遂ニ死ニキ。其後子供ハ、畑一面残ル所ナク、掘リ返シ、土クレナドフルヒテ、捜シケレドモ、終ニ、タカラハ、見アタラザリキ。

サレドモ、此畑ニ蒔キタル麥ハ、平年ニマシテ、ミノリ多ク、思ノ外ノ利益ヲ得タレバ、是ニ至リテ、其子等ハ、始メテ、父ノ遺言ヲサトレリトゾ。

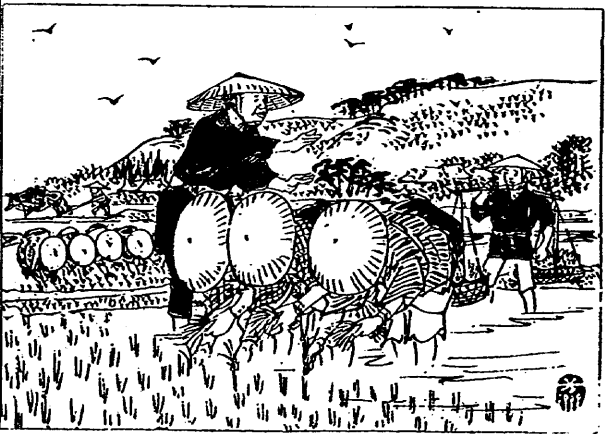
重習第十

五港の五市場は、武藏の横濱、攝津の神戸、肥前の長崎、越後の新潟、渡嶋の館箱なり。田畑を耕すには、深く耕し、細かに、土を碎くこと、肝要なり。

第二十 田植

透 續 忙 笠
空は、一面にかきくもりて、日に日に、日輪の光と透さずして、雨は、連日降り續く。是五月雨の候にして、田家にては、誠に、忙はしき田植の時節なり。

見よ、數多の農夫は、頭には、笠といたたき、身には、



簀泥

簀と著け、雨にぬれ、泥にまみれ、苗と、田に植ゑとるなり。

苗は、初、もみと、苗代にまき、稍長くて後之とぬき取りて、田にうつし植うるなり。

農夫は、かく辛苦して、米穀と作出すものなれば、汝等、之と食することと、粒粒其辛苦に出でしことと忘るべからず。

第二十一 四季

軟

軟風ハ、氷ヲ解キ、四方ノ山山、霞ヲコメテ、

含 朶

草木、萬朶ニ、花ヲ開キ、空合、ノドカニシテ、氣候、寒カラズ、暑カラズ、萬物、皆、笑ヲ含ム。

既ニシテ、花落チ、葉榮エ、

日光、焼クガ如ク、時時、雷

雨アリテ、僅ニ、涼風ヲ送り、

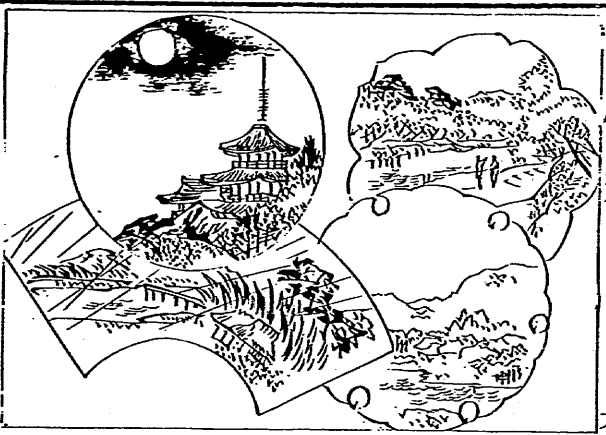
蟬、蜻蜓ナドノ蟲類ハ、時

ヲ得顔ニ、飛ビマハル。

日、漸ク短クシテ、白露降

リ、北風、稍、冷氣ヲ帯ビテ、

顔 蟬、蜻蜓



錦淋

木葉、錦ヲ織リナシ、一天、何トナク、物淋
シキ光景ヲ見ス。

日、愈短クシテ、寒氣、益烈シク、白雪、地ニ
満チテ、池水ハ、氷ニ閉ヂラル。

移 序

是、春夏秋冬、四季ノ有様ニシテ、年移リ、
物變ルト雖モ、決シテ、此順序ヲ亂スコト
ナシ。

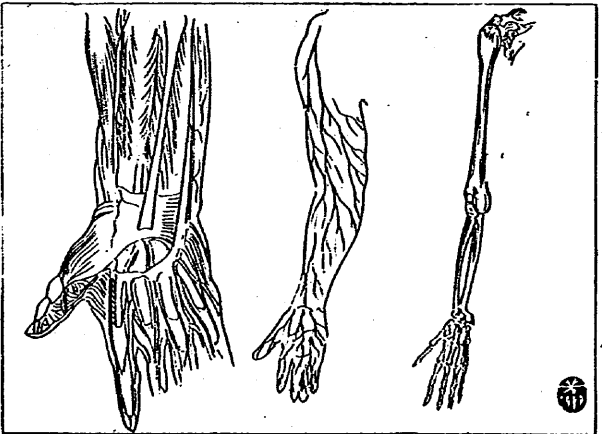
重習第二十

頭に、笠をいただし、身に、蓑を著け、忙はしき農時
は、五月雨のころなり。
四季は、春夏秋冬にして、春は、暖に、夏は、暑く、秋
は、涼しく、冬は、寒し。

使用

第二十二 良き器械

手は、萬種の器械を使用する者にて、凡う、
此ひろき世界には、種種
の器械少からざれども、
皆、此手の働きに依らざ
るはなし。
手は、甚た便利なるもの
なれども、日日使用する
ものなれば、其良き器械

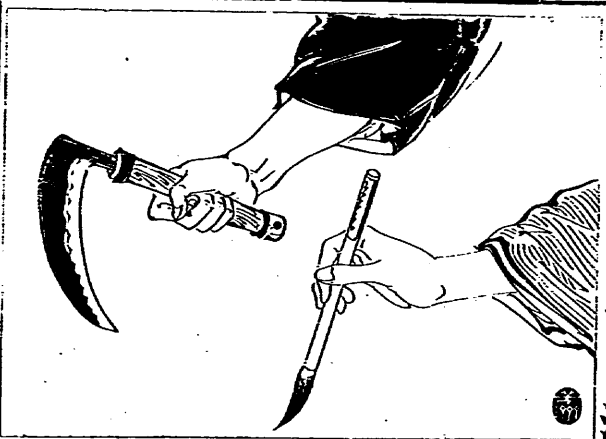


たることを知らざるものあらん。
 手は、如何なる事にも、如何なる時にも、使
 用するものにて、文字と書き、田畑と耕し、
 器具と作り、漁獵とするにも、皆、手の働き
 に依らざるものなり。

僅 排 結

手は、木石金鐵等を以て作りたる器械の
 如きものに非ず。長さ、僅に、一尺餘に
 て、三十個の硬き物を排べ、強き帯を以て、
 之と結合せ、柔なるものにて、其上を包み、

滑 包



自然に、油を出して、其運動を滑ならしむ
 るものにして、油をさすわざも、蒸氣の力
 をかることも須ひざるな
 り。
 手は、富貴、貧賤、老若、男
 女の別なく、人人、皆、之
 と有せるものにて、其使用
 の如何に由りて、善き働と
 なし、悪き働となすもの

枚、
筋、
筋

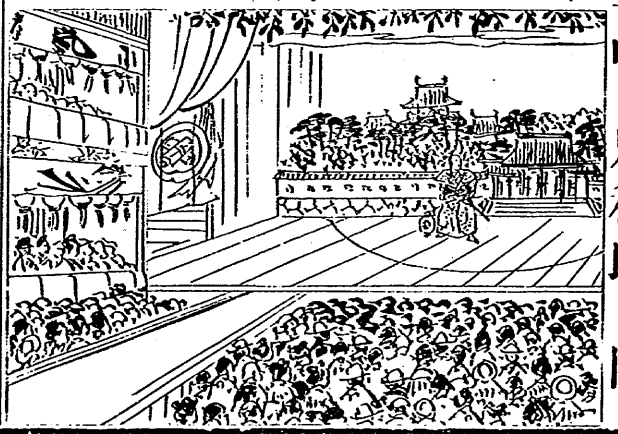
なり。
緒、手は、三十枚の骨より成り、鞆帯と稱する、強き筋を以て、之と結合せ、柔なる皮肉を以て、其外面を包めるものにして、運轉自在に、指端の作動、鋭敏なれば、世界、巧妙の器械多しと雖も、一として、手の良き器械に及ぶものあらず。

重習第三十
手は、良き器械にして、世界、万種の巧妙なる器械あれども、之に及ぶものなし。
鞆帯を以て、結合せ、皮肉を以て、外面を包み、三十枚の骨を動して、万物を作出すは、手なり。

第二十三 演劇

演劇
巫女
阿國

傳へ言フ、演劇ハ、天正年中、足利氏ノ臣、名古屋山三郎、出雲ノ巫女、阿國トトモニ、舞樂ヲ奏シテ、我君ノ万歳ヲイハヒタルニ始リ、ツイデ、徳川氏ノ幕府ヲ、江戸ニ開クニ及ビテ、中村勘三郎ト云フモノ、官ノユルシヲ得テ、



座

舞樂ヲヨクスルモノヲ集メ、一座ヲナシタ
リトゾ。

其演スル所ニ、三種アリ。一ハ、古ノ忠臣

孝士等ノ事跡ヲ演シ、一ハ、専ラ、古今ノ

世態人情ヲウツシ、一ハ、舞踏ヲ以テ主トナ

ス。此三ノモノハ、皆、ナラビ行レテ、各

妙趣アリ。

近來、演劇改良會トイフモノアリテ、一種ノ演劇

ヲ起シ、舊時ノ演劇ヲ改良セントスルモノアリ。

事跡
人情
舞踏

妙趣

第二十四 眞實



或日、二人の子供は、丸木橋と渡らんとし

て、一人は、過ちてねちた

りしが、其橋の下は、小砂

のみにて、水もあらざりけ

れども、ねちたる子供は、

只、聲をあげて、助と求む

るのみなりき。

他の一人は、之を見て驚

只助
過
驚

介抱

き、直に飛下りて、引起し、深切に介抱し、た
りしが、何か、心に浮びし事ありと見はて、
汝は、工夫をなす、自ら、きしに上れ、汝の
手足は、汝を助けんがために、汝の身に在
り、汝の手足の、汝を助くることあたはざ
る時、始めて、他人の助を乞ふべしと教へ
たり。

重習第十四

演劇は、舞踏を以て、古今の世態、人情、忠臣、孝子
の事跡を演ずるものなり。
己の手足の、己を助得ざるに及びて、人の助を乞ふ
べし。

第二十五 源頼朝

源頼朝ハ、左馬ノ頭義朝ノ三男ナリ。十三

歳ノ時、父義朝ニ從ヒテ、平

氏ト戦ヒシガ、味方ヤブレ

テ、平氏ノタメニ捕レ、六

波羅ニオクラレケリ。

ヤガテ、キラルベカリシヲ、

平清盛ノ義母、池ノ尼ニ助

ケラレ、伊豆ノヒルガ小嶋



六波羅

池ノ尼

伊豆

治承
以仁王

好機

義仲

ニナガサレタリ。
後、二十餘年ヲ經テ、治承四年ニ至リ、以仁
王、平氏ヲウツベキ令旨ヲ發シ給ヒシカバ、
賴朝、此ニ、好機ヲ得テ、義兵ヲ、伊豆ニ起
シシニ、所在ノ武士、忽チ之ニ應シ、又弟義
經、陸奥ヨリ來リ會シテ、兵勢、強大トナリヌ。
時ニ、源義仲モ、亦兵ヲ起シ、大ニ平家ヲヤ
ブリ、遂ニ、京都ニ進入リケリ。

第二十六 つづき

擁

範賴

征夷

鎌倉



是ニ於テ、平氏ノ一門、安德天皇ヲ擁シ、西
國ニ走リケリ。此時、賴朝ハ、更ニ、範賴、義
經ヲツカハシ、義仲ヲ、京都
ニウチ、平氏ヲ、西海ニホロ
ボシテ、遂ニ海内ノ爭亂ヲ
シヅメ、其身ハ、征夷大將軍
ニ任セラレ、又、六十六國
ノ總追捕使トナリテ、幕府
ヲ鎌倉ニ、開キタリ。是、

我國、幕府ノ初ニシテ、今ヲ去ルコト、凡ソ七百年以前ナリ。

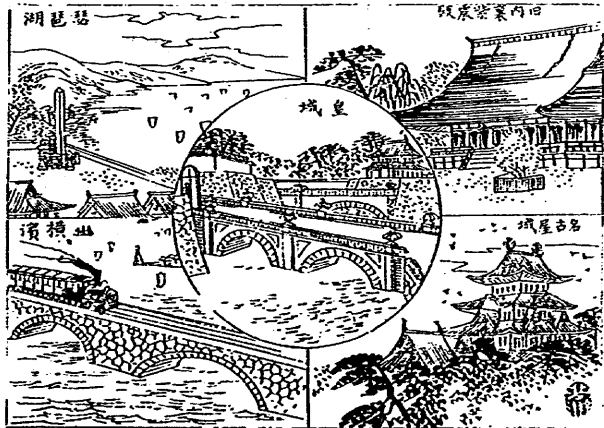
倭、頼朝ハ、武勇、人ニスグレ、大將ノ器アル人ナリケレドモ、獨、ウタガヒノ心深クシテ、罪モナキ弟範頼、義經ヲコロシ、今日ニ至ルマデ、残忍ノ人ト言ハルルハ、チシムベキ事トイフベシ。

重習第五十

頼朝は、義朝の男にして、伊豆に流され、後、好機を得て、平家をほろぼせり。範頼、義經は、頼朝の弟なれども、終に兄の爲にころされき。

第二十七 旅行

桓武
今、汝等に、京都より東京に至る道中の話となすべし。京都は、今より一千餘年前、桓武天皇の開き給ひし都にて、市街端正、山水秀麗なり。此より、瀛車にて、東に走れば、世に有名なる近江の琵琶湖に出づ。沿岸に、



美濃

近江八景の勝あり。うれより、美濃を経て、尾張名古屋に至る。名古屋は、東西兩京の中間にある、繁盛なる都會にして、其南一里と隔てて、熱田神社あり。即ち、草薙の寶劍と祀れる社なり。又、三河、遠江と過ぎ、駿河の界なる大井川と渡り、左に、富士の白雪と仰ぎ、右に、駿海の碧波とのうみ、足柄山と越えて、相模に下り、武藏の横濱に至れば、我國五港中の大港にて、又、一層の繁盛なる地なり。

祀、駿河

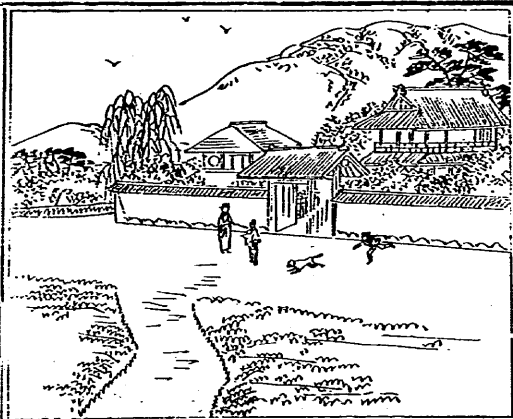
仰、碧

官衙

其より、八里許にして、東京より著く。東京は、皇城諸官衙の在る所にして、其繁盛なることは、我國第一なり。

乾燥

床



第二十八 住居の撰擇
凡ソ、住居ハ、土地ノ乾燥ニシテ、濕氣ナキ地ヲエラビ、家屋ハ、床高クシテ、空氣ノ流通ヲ宜シクスルコト、肝要ナリ、

汚水
濕氣

射入

家祟、迷

汚水等ノタメニ、濕氣多キ土地ハ、種種ノ
病毒ニチカサルルコトアリ。窓ノ位置惡シ
クシテ、又、其數少ケレバ、光線ノ射入ト、空
氣ノ流通トヲ妨ゲテ、身體ノ健康ヲ害シ、終
ニ、世人ヲシテ、家祟ト迷ハシムルコトアル
ニ至ル。住居ノ撰擇ハ、マコトニ、ツツシム
ベキコトナリ。

重習第六十

琵琶湖の八景、富士の白雪、駿海の碧波は、東海旅行
中の絶勝なり。
空氣の流通をよくし、濕氣の乾燥をはかるは、住居
についての肝要なることなり。

第二十九 砂糖

甘蔗

砂糖は、種種の植物より、製することを得
れども、甘蔗より採れるもの、最も多し。

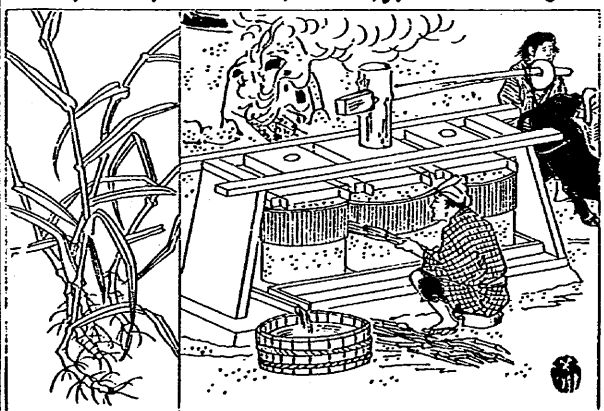
玉蜀黍

丈

甘蔗は、葉莖共に、玉蜀黍
に似て、其長、一丈に及ぶ
ものあり。其成長したる

刈

時、根元より、之を刈取り、
石、又は、鐵にて造りたる



搾釜

追

汲

瓶置漸

晒

搾り器械を以て、甘き汁を搾取り、釜に入れて、煮るときは、汁は、追追に濃くなるにより、之を汲出し、瓶に移して、冷し置くときは、漸漸にかたまり、遂に、茶色の砂糖となる。

白砂糖は、茶色なる砂糖を晒して、更に、善く製し上げたるものなり。

第三十 照會

書籍之有無を問合する文

尺素拝呈陳ハ尋常小學校用の杖桑讀本只今貴店にて御賣捌きに相成居矣哉少く買入度候条至急何分ぞ御返答奉待候

全返事

御紙面拝見仕矣然者昨日御問合に相成居杖桑讀本の義澤山着荷致居候間多少にまらす御用を仰付度重疊御願申上候

書籍注文之文

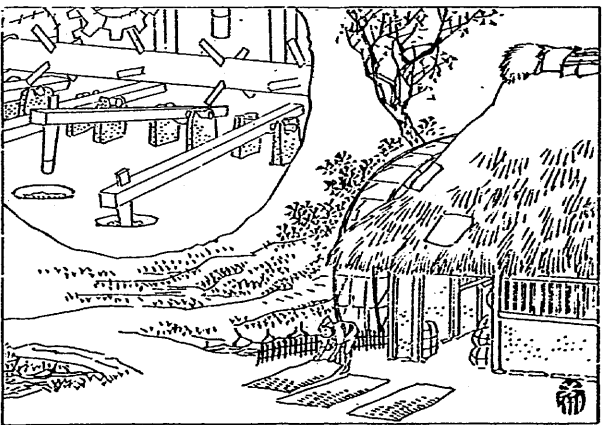
一書呈上然バ先日法尋申上矣扶桑
 讀本の有無直ニ御返答被成下難有
 奉存矣第七々卷十冊丈入用致候ニ
 付至急御送附比下度尤代金々義ハ
 書籍着次第直ニ御送り可申上矣條
 左様御承知被下度矣

重習第七十

砂糖は、器械を以て、甘蔗の莖を搾り、其汁を煮て、
 製せしものなり。
 貴店之書籍御送り被下有りがたく存じ候。

第三十一 水車

我國ノ水車ハ、今ヲ去ル
 コト、凡ソ、一千年前、良
 岑安世トイヒシ學者ノ發
 明セシモノナリ。此車ハ、
 水流ノ急ナル所ニ仕掛ケ、
 水力ニヨリテ、運轉セシ
 メ、日毎ニ、數多ノ米ヲ
 ツキ、粉ヲヒキ、其他、種
 種ノ業ヲナサシ



考

湯氣 蒸氣

ムルナリ。
何事ニテモ、深く考フル時ハ、皆、世ノ中
ノ用ヲナスヲ得ベシ。タトヘバ、湯ノワク
時ニ、其湯氣、即チ、蒸氣ガ、鐵瓶ノフタヲ
上グルコトヨリ、瀛車、瀛船等ノ器械ヲ發
明セシ如キ類ナリ。

第三十二 三種ノ神器

我國、三種の神器は、昔、天孫、我豊葦原の
中つ國に、降り給ふ御時、天照大神の、授け

豊葦原 天照大神 授

御寶

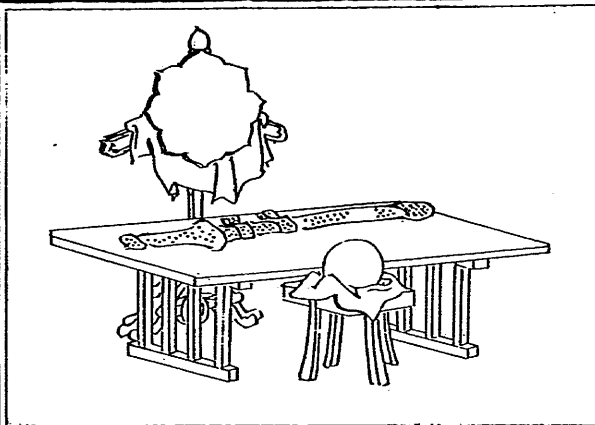
瑞 詔 穗

寶 祚 共 窮

給ひける御寶なり。

其時、大神、詔して、豊葦原の瑞穂ノ國は、

吾子孫の君たるべき國な
り、爾皇孫、就きてとさめ
給へ、寶祚の隆ならんこと、
天地と共に窮りなかるべ
しと宣ひて、御手づから、
神寶と授けて、ながく皇位
のゝるゝと給ひなり。



八咫、御鏡

齋、叢雲

10171.8

至尊
天祖

さて、其神寶の一は、八咫の御鏡にて、伊勢神宮に齋きまつれり。其二は、天の叢雲の劍にて、尾張の熱田の宮にまつます。至尊は、天祖の正胤にまつまつて、天祖と同體にれはします。實に、天地と窮り無きは、寶祚なり、仰ぎ尊ぶべきは、皇統なり。

重三種の神器は、八咫の鏡、天の叢雲の劍、八坂瓊の勾玉なり。
第十水車は、良岑安世の、發明せしものにて、後世、便利を得るこそ少からず。

福岡縣福岡市博多下吳服町

鐵耕堂編纂部

福岡縣福岡市博多下吳服町

鐵耕堂 竹田 芝 郎

福岡縣福岡市糀屋町

高田 芳 太郎

山口縣赤間關市入江町

山名 松 次 郎

山口縣厚狹郡舟木町

中原 卯 兵 衛

定價九錢五厘

明治二十七年

十二月十八日

印刷

明治二十七年

十二月廿八日

發行

編輯者

發行兼印刷者

發賣所

同

同

